

TAT (Thematic Apperception Test) に表される プロットについて—ナラティブの観点から

海 本 理 恵 子

1. はじめに

TATはThematic Apperception Testの略称である。TATは、絵の情景とその中に描かれた人物に関連して、物語を創作させる心理テストである。TATは、解釈法・分析法が確立していない。解釈は、検査者の主観、直感に頼る部分も少なくない。その手がかりのひとつとして、「繰り返し表現されるもの」が挙げられる。TATは1シリーズとして20枚という多くの図版を用いる。その検査設定自体に、「繰り返し表現されるもの」を期待しているといえるであろう。繰り返し表現されるという事象はナラティブ・ストーリーを想起させる。本研究において、この繰り返し表現される事象を、ナラティブの観点から考察していく。

2. 問 題

(1) TATにおける主題

TATは、絵の情景とその中に描かれた人物に関連して物語を創作させる心理テストである。TATの創始者であるH.A.Murray (1935, 1938) は人格学の構築を目指し、人格研究の方法に関して様々なアプローチを試みており、人格研究のための手法のひとつとしてC.D.MorganとともにTATを考案している。Murrayの人格学では、「エピソード」、「欲求—圧力構造」、そして「主題」が中心概念となっている。Murrayは、生活体は誕生から死に至るまでの、時間に関連を持った活動の、無限に複雑な系列から成り立っていると考えた。その系列の中から任意に選択された一部分をエピソードと呼び、エピソード研究を人格研究の有効な手段とした。Murrayは、エピソードの構造を、生活体が置かれている環境とそれに対する生活体の反応の力学的な相互作用の過程から成り立っていると考え、生活体に影響を及ぼす環境の力を圧力と呼び、圧力に対する生活体の内的な反応を欲求と定義した。エピソードに現れるこの欲求—圧力構造は主題（テーマ）と呼ばれる。TATは抑圧されたエピソードを引き出すことを目的として用いられており、分析方法としても欲求—圧力分析をMurrayは勧めている。以上が、TATの理念的立場である。しかし、実際MurrayやMorganらが事例研究を行っている「パーソナリティの研究」(1938)を読み解くと、理念とは多少異なったTATの産物を発見することができる。

MurrayやMorganらが残したTATの解釈事例を検討すると、彼らは、主題の発見という作業は採用しつつ、その主題を欲求—圧力構造に帰することにはこだわっていないことが示されている。主題を表す言葉は欲求—圧力構造を参考にはしているが、それに縛られたものではなく、むしろ

自由に直感的に選ばれている。TATにおいて、欲求—圧力構造を分析することよりも、直感的に主題を掴むことの方が、より物語の創り手の実像に迫るという彼らの経験的実感が示されているものと思われる。

(2) 繰り返し表現される主題、プロット

では、TAT物語に表された主題は物語の創り手にとっていかなる意味をもつのであろうか。海本(2004)は「様々な場面で、様々な形で繰り返し、出現するような主題がTAT物語に表現されること」を述べている。繰り返し表現される主題は、創り手の内側に深く刻まれているものであり、そのため、知らず知らず、繰り返し表してしまうものと考えられる。ここで、ナラティブの概念がTAT物語に大きな視野をもたらすであろう。ナラティブは、家族療法の分野から出てきた概念であり、症状や出来事、問題、今置かれている事態などを、その人そしてその家族の「物語」として捉えるものである。家族を中心にさまざまな人々の相互作用によってたえず構成されつつある「物語」が個人の中にはあり、その「物語」によって行為するのだという。重要なものでは、経験の中で生成され、無意識のうちに繰り返してしまう物語のプロット(筋書き)が個人の中に存在するという視点である。大山(2004)は、TATには「特定のプロットが反復して出てくる」ことを挙げ、「人生の決定的な場面においてその被検者が図らずも自ら毎回選びとり、自らが構成してしまうパターンが物語構成にも表れているという見方もできる」と述べ、TATのナラティブ的特性を指摘している。主題が包括的かつ焦点を絞る方向にあるものとするならば、プロットは時間的、空間的な広がりを持ち、物語のつながりや流れに視点が置かれたものと考えられることができるであろう。TATにおいて、主題やプロットが繰り返される現象は、創り手の中にある主題やプロットが、行為としてTAT物語に表されていると考えることができる。ナラティブの視点を持つとき、TAT物語は作り手にとって「他ならぬ自分の物語」であることがより強く意識される。

(3) 他ならぬ自分の物語

「自分が直接に責任を持つ必要のない空想産物としてつくられている(辻・高石, 1959)」ということが創り手にとってのTAT物語の特徴として挙げられる。TATにおいて、①自分自身が創った物語であるということ、②自分自身についての物語ではないこと、この両者が共存することが、創り手にとって重要なことである。自らが創ったTAT物語について、「本で読んだようなストーリーになった」とか、「映画でこういうのがあった」という感想を聞くことがよくある。自分についての物語ではないという印象を持つのだ。一方で、TAT物語を通して自分を見る創り手もある。検査という役割を超えたTATの治療的利用に関する報告や研究がなされている。Bellak(1949)は、自己について語ることが困難であった患者が、TAT物語を通して、自らの主要な問題や葛藤について、治療者と論じ合うことができるようになった事例を報告している。また、村瀬(1995)はTATについて、被検者が許容しうる範囲で、反応についての意味の検索を検査者と共同に行なうことが治療の展開を円滑にすると述べている。自分についての物語ではない、でも他ならぬ自分の物語だ、というこの両者の間での微妙なバランスを物語が持っていることがTATの醍醐味であろう。創り手は自分についての物語ではないTAT物語に「他ならぬ自分」を感じるのである。「他ならぬ自分」を感じる要因というのは様々にあるだろうが、TAT物語に表現された自らに染みたプロットは、創り手も感ずるところが多いのではないだろうか。

本論文では、知らず知らずのうちに選びとり、自らが構成してしまうパターンが表れるというTATのナラティブ的特性について考察することを目的とする。本研究では、その方法として繰り返しの事象に注目し、物語の修正という方法をとる。物語の修正という課題によって、その物語に対する創り手の在り方が明らかになると考えるからである。TAT物語に知らず知らず選び取り、繰り返してしまうパターンが表されているのならば、修正という課題においてもそのパターンは保持される傾向にあるのではないだろうか。

3. 目 的

TAT物語を修正させるという方法を用いることにより、TAT物語における、繰り返される現象を考察することを目的とする。その際、物語の創り手にとって、自ら創った物語の特殊性がさらに明らかになることを意図し、自らが創ったTAT物語の修正と、他人の作ったTAT物語の修正との二つの課題を用意し、それらを比較することにした。

4. 方 法

（1）被検者

大学生および社会人108名（男子52名、女子56名）を被検者とした。平均年齢は、全体22.1歳（SD=3.4、範囲：18歳～40歳）、男性22歳（SD=2.4、範囲：18歳～28歳）、女性22.2歳（SD=4.1、範囲：18歳～40歳）であった。

（2）材料

①TAT図版

図版の選択と提示順序については、安香（1997）を参照し、図版のシリーズとしての特徴と、バランスを考慮した。本研究においては、Murray版の図版4枚（図版3 BM、図版10、図版17GF、図版20）を使用した。これらは図版3 BM、図版10、図版17GF、図版20の順に提示された。それぞれ順に図版Ⅰ、図版Ⅱ、図版Ⅲ、図版Ⅳという便宜上の名前をつけた。以下この図版番号を使用する。また、以下、図版に対応する物語をそれぞれ物語Ⅰ、物語Ⅱ、物語Ⅲ、物語Ⅳとする。

②TAT物語記入用紙

本調査は集団法で計画されたため、TAT試行を記入という方式をとって行った。TAT物語を記入するための用紙を用意した。

③サンプル物語提示用紙

予備調査で得られた物語から本研究で用いる4図版それぞれについて、サンプル物語を用意した。その際、鈴木（1997）を参照し、サンプル物語があまり特異性を持たないことに留意した。以下にそれぞれのサンプル物語を示す。

物語Ⅰ：『この人は、中年の主婦。家事、育児に追われ続け、自分の人生の目的を考える暇もなくすごしてきたが、余りに疲労がたまってしまったため、座りこんで体を休めている。この毎日が私を生かし続けているのか、私が生きているからこの毎日が続くのか…と考えながら、まだ仕事が終わらないことを憂う。しかし、彼女は、この人生から抜け出すことを試みることはない。』

物語Ⅱ：「2人の恋人がダンスを踊っている。もうすぐ時間が来て、2人は離ればなれにならなければならない。残り少なくなった時間を感じながら、名残り惜しむ気持ちで一杯になっている。お互いのぬくもりを確認しあっている。その後、2人は家路につく。」

物語Ⅲ：「若い女の人が家への帰り道、橋の上でふと立ち止まって、橋の下を眺めている。橋の下では男たちが働いている。今、荷物を積んだ船が到着したようだ。とても暑い日である。男たちは汗だくになりながら荷物を工場まで運んでいる。女の人はその様子をいつまでも眺めている。」

物語Ⅳ：「夜の街で、男性が街灯によりかかって、人を待っている。遠く灯りの見える所に駅がある。相手は、その駅に着く列車に乗っているはずだ。しかし、男性はそちらを見るでもなく、じっと立っている。いくつもの列車が駅を過ぎていくが、相手は現れない。ついに最終の列車が通り過ぎ、男性は歩いてその場を離れる。」サンプル物語提示用紙は、筆者が手書きをしたものをコピーしたものを用意した。

④物語に関する自由記述用紙

物語を作ったり、読んだりしてみたの感想を記述する用紙を用意した。

②③④は実験条件にあわせて、用いる順に綴じて、質問紙①として冊子にした。

⑤修正用紙

修正した物語を記述するための用紙を用意した。

⑥修正に関する自由記述用紙

物語を修正してみたの感想を記述する用紙を用意した。

⑤⑥は実験条件にあわせて、用いる順に綴じて、質問紙②として冊子にした。

(3) 手続き

調査は集団法で行われた。調査は二つの段階に分けられた。

(第一段階) 質問紙①を使って行った。図版Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの順に提示した。提示に際して、図版Ⅰ、Ⅲについては、TAT物語を作らせた。教示は以下のものであった。「図版Ⅰ（もしくは図版Ⅲ）を見て思い浮かぶ物語を作って下に記入してください。この絵の中の人は、今、何を感じ、どうしているのか、この絵の前にはどんなことがあって、この絵の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて話してください。」また、図版Ⅱ、Ⅳについては、あらかじめ質問紙に書かれてあるサンプル物語を読ませた。教示は以下のものであった。「ある人が図版Ⅱ（もしくは図版Ⅳ）を見て物語を作りました。以下がその物語です。よく読んでください。」図版Ⅰ～Ⅳ全てについて終わった後に、物語を作ったり、読んだりしてみたの感想を自由記述させた。

カウンターバランスを取るために、図版Ⅰ、Ⅲについてサンプル物語を提示し、図版Ⅱ、ⅣについてTAT物語を作らせる被検者もあった。どちらの場合も図版の提示順序は同じであった。前者をグループA、後者をグループBとした。グループAは59名、グループBは49名であった。

(第二段階) 質問紙②を使って行った。第二段階は、第一段階で作られた、もしくは提示された物語を修正させるものであった。修正は赤ペンによって行わせた。教示は以下のものであった。「図版Ⅰに対応する質問紙①の物語Ⅰについて、修正をしたい部分はありませんか。もしあるのなら、修正を加えてください。修正は赤ペンで質問紙①に直接行ってください。お話の大部分を書き換える場合や、お話の続きを書く場合は質問紙②に記入してください。」修正は、図版Ⅰ、

Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの順にそれぞれ行わせた。その後，修正についての感想を自由記述させた。

以後，作らせたTAT物語を自分物語，読ませたサンプル物語を他者物語と呼ぶ。また，修正されたTAT物語を修正自分物語，修正された他者物語を修正他者物語と呼ぶ。

4. 結 果

（1）自分物語の修正の仕方と他者物語の修正の仕方との関連の検定

・修正の仕方 修正の仕方として，「全体修正」「部分修正」「続き」「修正なし」の4つの場合を考える。全体修正とは物語の全体を違う用紙（物語修正用紙）に書き換えた場合である。部分修正とは，部分的な書き加えを行ったり，もとの物語の部分を書き換えたり，削除したりした場合である。続きとは，物語の結末を書き換えた場合，もしくは物語の続きを書き加えた場合である。もとの物語の最終部分を書き換えた場合には，「部分修正」の修正の仕方にも，「続き」の修正の仕方にも含まれた。修正なしとは，物語の修正を全く行なわなかった場合である。

（i）全体修正 自分物語，他者物語，それぞれの場合において，2つの物語のうち，全体修正を1つでも行なった場合を＋（プラス），1つも行なわなかった場合を－（マイナス）とした。自分物語＋と自分物語－における他者物語＋または他者物語－の人数は表1のとおりであった。自分物語の修正の型と他者物語の修正の型との関連があるかどうかを調べるために独立性の検定を行なった。直接確率計算法を行なった結果，有意差が見られた($p<.05$)。したがって下位検定のため，自分物語＋の場合における他者物語＋と他者物語－とを比較する二項検定と，自分物語－の場合における他者物語＋と他者物語－とを比較する二項検定を行なった。その結果，自分物語＋において有意差は見られなかった。自分物語－において他者物語－が他者物語＋よりも有意に多かった($p<.01$)。

つまり，自分物語について全体修正を全く行なわなかった者の中においては，他者物語の全体修正を全く行なわなかった者のほうが，他者物語の全体修正を行なった者より有意に多いと言える。自分物語について全体修正をひとつでも行なった者の中において，他者物語の全体修正における差は見られなかった

表1 全体修正における自分物語、他者物語の修正の仕方

		他者物語		合計
		＋	－	
自分物語	＋			
	度数	8	3	11
	期待度数	4.1	6.9	11.0
	－			
	度数	32	65	97
	期待度数	35.9	61.1	97.0
合計	度数	40	68	108
	期待度数	40.0	68.0	108.0

$p<.05$

（ii）部分修正 自分物語，他者物語，それぞれの場合において，2つの物語のうち，部分修正を1つでも行なった場合を＋（プラス），1つも行なわなかった場合を－（マイナス）とした。

自分物語+と自分物語-における他者物語+または他者物語-の人数は表2のとおりであった。(「全体修正」と「部分修正」の修正の仕方の分類の手続きより、「部分修正」における自分物語+は、「全体修正」における自分物語-に含まれるという関係にある。)自分物語の修正の型と他者物語の修正の型との関連があるかどうかを調べるために独立性の検定を行なった。直接確率計算法を行なった結果、有意差が見られた($p<.05$)。したがって下位検定のため、自分物語+の場合における他者物語+と他者物語-とを比較する二項検定と、自分物語-の場合における他者物語+と他者物語-とを比較する二項検定を行なった。その結果、自分物語+において他者物語+が他者物語-よりも有意に多かった($p<.01$)。自分物語-において有意差はみられなかった。

表2 部分修正における自分物語、他者物語の修正の仕方

		他者物語		合計
		+	-	
自分物語 +	度数	55	19	74
	期待度数	50.0	24.0	74.0
-	度数	18	16	34
	期待度数	23.0	11.0	34.0
合計	度数	73	35	108
	期待度数	73.0	35.0	108.0

 $p < .05$

つまり、自分物語において部分修正を行なった者の中においては、他者物語の部分修正を行なった者のほうが、全く行なわなかった者よりも多いと言える。自分物語において、部分修正を行なわなかった者の中においては、他者物語の部分修正の仕方に差はなかったと言える。

(iii) 続き 自分物語、他者物語、それぞれの場合において、2つの物語のうち、続きについての修正を1つでも行なった場合を+ (プラス)、1つも行なわなかった場合を- (マイナス)とした。自分物語+と自分物語-における他者物語+または他者物語-の人数は表3のとおりであった。自分物語の修正の型と他者物語の修正の型との関連があるかどうかを調べるために独立性の検定を行なった。直接確率計算法を行なった結果、有意差が見られた($p<.05$)。したがって下位検定のため、自分物語+の場合における他者物語+と他者物語-とを比較する二項検定と、自分物語-の場合における他者物語+と他者物語-とを比較する二項検定を行なった。その結果、自分物語+において他者物語+が他者物語-よりも有意に多かった($p<.01$)。自分物語-において他者物語+が他者物語-よりも有意に多かった($p<.01$)。

表3 続きにおける自分物語、他者物語の修正の仕方

		他者物語		合計
		+	-	
自分物語 +	度数	48	11	59
	期待度数	43.7	15.3	59.0
-	度数	32	17	49
	期待度数	36.3	12.7	49.0
合計	度数	80	28	108
	期待度数	80.0	28.0	108.0

 $p < .05$

つまり、「続き」における自分物語の修正の型に関わらず、他者物語では続きについての修正を行なった者のほうが、全く行なわなかった者よりも多いと言える。さらに、独立性の検定の結果と表3より、自分物語において続きの修正をした者は、自分物語において続きの修正をしなかった者に比べて、他者物語において続きの修正をした者を含む比率が高いと言える。

（iv）修正なし 自分物語、他者物語、それぞれの場合において、2つの物語ともになんらかの修正を行なった場合を＋（プラス）、2つの物語のうち、全く修正を行なわなかった物語が1つでもある場合を－（マイナス）とした。自分物語＋と自分物語－における他者物語＋または他者物語－の人数は表4のとおりであった。自分物語の修正の型と他者物語の修正の型との関連があるかどうかを調べるために独立性の検定を行なった。直接確率検定法を行なった結果、有意差は見られなかった。そこで、自分物語＋と自分物語－の人数をコミにして他者物語＋と他者物語－の人数差を検定した結果、有意であった($p<.01$)。また、他者物語＋と他者物語－の人数をコミにして、自分物語＋と自分物語－の人数差を検定した結果、有意差はなかった。つまり、修正なしにおいて、自分物語の修正の型と他者物語の修正の型との関連はなく、全体の傾向として、他者物語においては、全く修正を行なわなかった物語が1つでもある者よりも、2つの物語ともになんらかの修正を行なう者の方が多いが、自分物語においては両者には差がないと言える。

表4 修正なしにおける自分物語、他者物語の修正の仕方

		他者物語		合計
		＋	－	
自分物語	＋			
	度数	48	10	58
	期待度数	49.4	8.6	58.0
	－			
	度数	44	6	50
	期待度数	42.6	7.4	50.0
合計	度数	92	16	108
	期待度数	92.0	16.0	108.0

n.s.

5. 考 察

（1）自分物語と他者物語の修正の仕方

（i）各々の修正の仕方における考察

初めに、自分物語の修正の仕方と他者物語の修正の仕方との関連を見ることによって、自分物語と他者物語とのそれぞれの修正の特徴について考察する。

まず、「全体修正」について、自分物語について全体修正を行なわない者は、他者物語についても全体修正を行なわない傾向にあることが明らかになった。全体修正とは、物語の全部を書き直すことであって、作られた物語場面とは全く別の物語場面を新たに作り出すという修正の仕方である。物語について全体修正を行なわないということは、存在する場面を保とうとする被検者のあり方である。自分物語の物語場面を保とうとする者においては、他者物語においても同様の傾向があると言える。

次に「部分修正」について、自分物語について部分修正を行なう者は、他者物語についても部

分修正を行なう傾向にある傾向にあることが明らかになった。部分修正は部分的な付け加えや、書き直し、部分的な削除であり、もとの物語場面をベースにして、物語のイメージを膨らませたり、物語に変更を加えたりする修正の仕方である。自分物語について、もとの物語場面をベースにして、物語のイメージを膨らませようとする者においては、他者物語においても、同様の傾向があると考えられる。

次に「続き」について、自分物語の修正の仕方に関わらず、他者物語では続きについての修正を行なう傾向にあった。そうした傾向の中でも、自分物語において続きの修正をしたの方が特に、他者物語において続きについての修正を行なう傾向が強いことが明らかになった。「続き」の修正は物語場面の結末にかかわるものである。物語の最終的な到達点を変え、物語場面の時間軸を未来へ進める可能性をもつ修正の仕方である。他者物語においては、物語の結末部分を変更しようとする傾向が表れやすいと言える。自分物語について物語の結末を変更するものについては一層その傾向が表れやすい。

最後に「修正なし」について、自分物語の修正の仕方と他者物語の修正の仕方とは関連がなかった。修正なしは、物語場面をそっくりそのまま保とうとする被検者のあり方である。調査から、他者物語について、修正を加えない物語があった者よりも、2つの物語になんらかの修正を加えた者の方が多かったが、自分物語においては物語に修正を加えない者と加えた者との差はなかった。被検者にとって、他者物語よりも自分物語のほうが、物語場面をそっくりそのまま保とうとするあり方が現れやすいと言える。

(ii) 検定からの考察

もとの物語の場面をそのまま引き受けて、その上で物語の場面のイメージを広げたり、物語の場面に変更を与えたりするあり方は、被検者内で自分物語と他者物語の間で関連が見られている。そこに存在する場面をそのまま存在させるか、もしくはその場面を一度無くし、新たな場面を産み出すのか、ここは大きな選択である。その選択には、自分の創った物語と他者が作った物語の間に分け隔ては見られず、被検者それぞれの物語の場面に対するあり方が表されると言えよう。

自分物語よりも他者物語に対してのほうが、物語の結末を修正するという傾向が強いことが見られる。自分物語、他者物語を提示された時、被検者は、他者物語に対し時と比べて、自分物語に対し時のほうが物語の結末を修正する必要性を感じなかったことが多かったと言える。物語の結末とは、被検者がここで物語を終わりとする、ある程度意識的な主体的かわりがなされるところと考えられる部分である。物語の結末部分の修正は、修正の中でも重要な意味を持つと考えられる。それは、同じプロットを辿っている物語も結末の違いでストーリーが異なるからである。結末の違いだけで、物語はハッピーエンディングにもバッドエンディングにもなる。物語提示場面においても、物語の結末のあり方は被検者にとって意識されやすい部分であり、物語修正も、ある程度意識的に行なわれるものと考えられる。物語の結末に対して修正しないということは、被検者は物語をこの終わり方で良い、ここで終えて良いとしていることである。他者物語において、自分物語よりも、物語の結末を修正する傾向が強いということは、他者物語の結末に対して、被検者はもとの物語になんらかの修正をする必要性を感じたということである。一方自分物語の結末に対しては、他者物語に比べて、物語の結末に対して修正をする必要性がなく、その結末になんらかの形で納得をしたということになる。結末に対する納得は、自分物語の特徴と言えるだ

ろう。

また、他者物語よりも自分物語のほうが場面をそっくりそのまま、何の変更も加えず保とうとするあり方が現れやすかったことが見られる。被検者が、物語に対して全く修正を加えずそっくりそのままの状態にしておいたということは、提示された物語を読む過程において、物語に「修正を行なおう」とさせるひっかかりを持たなかったといえる。物語が被検者に流れるように入っていた状態、もしくは、物語をそのままにしておこうという被検者の意志が働いた状態が考えられる。自分物語において、他者物語よりもそうした「修正を行なおう」とさせるひっかかりを持たないということも、自分物語の特徴として捉えられる。

以上のことから、自分物語は、他者物語に比べて、物語の結末に修正を行なわない傾向と物語に全く修正を行なわない傾向とが強かったと言える。自分物語は他者物語と比べて、そのままであって良いという肯定の意志の起こるもの、もしくは、ひっかかりなく流れて行くものであり、その終わり方に納得をしやすいものと考えられる。物語の修正の機会がありながらも、被検者は自らの物語を繰り返すことを選んだといえる。この結果は、TAT物語に、被検者の持つプロットが表現されるという仮説を支持するものと言える。このことから、TAT物語にはナラティブ・ストーリーの要素があることが示唆される。

（2）被検者Aの事例

調査と分析の結果から、修正の仕方の形式面から、自らが作った物語や、物語の結末がそのまま採用され、繰り返される事象を確認することができた。この場合は、物語がそのまま残されるという繰り返され方であった。では、自分物語を修正した場合、そのプロットはどのように変化しているのだろうか。このことを明らかにするために、ある一人の被検者の物語とその修正の物語の内容を検討する。

（1）Aの物語

グループB（図版Ⅰ，図版Ⅲにおいて自分物語を書き，図版Ⅱ，図版Ⅳについて他者物語を提示されたグループ）の中で，2つの自分物語，2つの他者物語の全ての物語で，物語の書き直しをした者は，グループ49名中1人のみであった。この者を被検者Aと呼ぶ。その内容を検討することにより，自分物語，他者物語の修正の特徴を比較することを試みた。被検者Aの物語は以下の通りであった。

【自分物語Ⅰ】学校での活動に疲れて帰宅。自転車のカギも投げ出してそのままソファの上にかがみこみ，しばし休憩。頭の中では今日朝起きてからの1日の出来事がぐるぐる回っている。でも，あまりの疲れのために生じた出来事について考える余裕はない。このまま疲れのために眠ってしまいそうだが，やらなければならないことも多い。睡魔との戦いに勝てたならば，今日の課題をこなしていくだろうが，負けた場合はそのまま眠りの世界へ。

【修正自分物語Ⅰ】ある人と待ち合わせをしていた。かなり久しぶりに会う友人であった。しかし，その友人は待ち合わせ場所には現れなかった。仕方ないので家に帰ってきた。長時間待っていた身体的な疲れと友人に裏切られたという心理的ショックの為にソファの上にうずくまる。何も考えられる状況ではなく，ただただ暗い気分がつのるばかりだ。母親の声が遠くから聞こえ現実の世界に戻っていく。

【修正他者物語Ⅱ】長らく会っていなかった恋人が久々に2人で会う機会を得ることができた。出会った瞬間二人とも今までの二人の間を切り裂いていた空間を少しでも早くなくしたいと考え、走り寄り抱き合う。二人とも幸せでいっぱいだ。同時に離れ離れの生活など二度としたくないと考え、その後二人は一生同じ屋根の下で暮らすことを固く約束する。

【自分物語Ⅲ】毎日の生活に疲れている人物が橋の上を通りかかった。本当は仕事をしなければならぬ時間ではあるが、川の流れを見ながらボーっとしている。仕事をさぼっている自分に少し快感を感じつつ仕事をさぼり、何を考えるわけでもない自分に疑問も感じる。自分の内部での対決は続くが、川の流れに心をいやされやがて仕事に戻っていく。

【修正自分物語Ⅲ】大好きな恋人と一緒に生活を始めた女性がいた。最初は本当に幸せだった。分かれることなど考えたことがなかった。しかし、やはり倦怠期は訪れた。恋人と共に暮らす部屋にすることがつらくなった女性はふらりと街へとくりだす。ふと川の景色に魅せられ、橋の上でボーっとする。そうこうしているうちに、やはりもう別れるしかないと固く決心し、その気持ちを告げるために部屋へと戻っていく。

【修正他者物語Ⅳ】ある男性が夜遅くに街灯にもたれている。非常に悲しげな様子だ。それも仕方あるまい。その男性は、大好きな恋人からふられてしまったのだ。愛し合っていると信じていた。別れることなど考えたこともなかった。もう何が起きているのか男性には考える余裕がなかった。ショックのためにどこかに行く気力もない。しかし、体はあまりにも寒かった。男性は重い体をなんとか動かして自分の部屋へと向かいはじめた。

(Ⅱ) 自分物語とその修正(自分物語と修正自分物語)

・4つの物語の概観

まずは4つの物語(自分物語Ⅰ, 修正自分物語Ⅰ, 自分物語Ⅲ, 修正自分物語Ⅲ)に目を通し、印象を得ようと思う。TAT物語を読む時、直観的、感覚的な部分が重要となる場合が多いにある。そういったものは最初の一読に得られるものも少なくない。なので、筆者は最初の一読はなるべく五感を自由にして、物語の中を漂うようにして物語を読むようにしている。藤田(1997)も、分析手順の始めとして、「印象の形成」を挙げており、「全ての図版のプロトコルを通して読み、全体の印象をつかむ」ことを述べている。本論では、紙幅の都合上割愛した部分が多いが、この作業はとても大切なものと考えている。一見すると、物語をただなぞっているだけのように見えるかもしれないが、この作業の中で物語を掴む焦点が浮かび上がり、後の作業に有効となる。最初に自分物語に注目する。二つの自分物語には共通のトーンが感じられる。物語に劇的な要素はなく、「川の流れ」のように流れていく。主人公の置かれている状況、感じている状態は、読み手にもリアルに想像することができる。話のプロットも重なる。主人公は、疲れを感じている。その疲れは日常生活に由来するものである。主人公はしなければならないことがあるにも関わらず、しばらくは、思考も行動も停止してしまう。自分物語Ⅰでは、「勝って」活動に戻ることと、「負けて」眠りの世界へ入ることとの間を彷徨っているというところで物語は終っている。自分物語Ⅲでは、自らの状況を客観視している主人公がある。主人公の心内では対立がありつつも、物語の最後では、仕事に戻っていく。

次に、修正自分物語を見ていく。自分物語Ⅰに対応する修正自分物語Ⅰでは、主人公がソファの上にうずくまっているのは、身体的な疲れのためだけではなく、「友人に裏切られたという心

理的なショック」のためでもある。「なにも考えられる状況でない」のは、自分物語Ⅰと共通する所である。物語の最後で、主人公は、「母親の声」によって、目が醒めるかのように「現実の世界に戻っていく」。自分物語Ⅲに対応する修正自分物語Ⅲでは、自分物語Ⅲと同様に「橋の上でボーっと」しているのだが、それは恋人との生活が「つらくなった」ためであり、心理的要因が色濃い。結末で主人公は、「（恋人と）別れる」と「固い」決心を持ちつつ、「部屋へと戻っていく」。

・4つの物語から得られるプロット

4つの物語からは同じプロットを得ることができる。それは、主人公が現実から少し身を引いた状態、「何も考えられない」状態と戻るべき現実の世界との狭間で立ち止まっている、うずくまっているというものである。このことは、一回のTATシリーズにおいて、同じプロット、同じ主題が表現されるという仮説を支持するものである。さらには、一度作られた物語を修正するという機会が与えられていても、同じプロットを辿る場合があることが示唆される。TAT物語において、修正の機会が与えられながらも、同じプロットを辿る場合があるということから、ナラティブ研究の観点が、TAT研究に有効である可能性が期待されるであろう。教示上では、TAT物語は自らに関する物語ではなく自由なプロットを選ぶ権利を与えられている。それにも関わらず、同じプロットを描いてしまうことがあるのだ。被検者Aの場合は特に、新たに物語を全て書き直しているにもかかわらず、修正自分物語が、自分物語と同じプロットであることは注目すべきところであろう。被検者Aは、物語を書き直すことを選択したが、結果として、同様なプロットが描かれたことになる。

・同じプロット、異なるストーリー

さらに、4つの物語は同じプロットでありながらも、そこに至るまでの経緯、その後の主人公のあり方は異なる。まずは、自分物語Ⅰと自分物語Ⅲを比較する。先述のとおり、自分物語Ⅰと自分物語Ⅲでは、物語の最後での主人公のあり方は異なっている。現実から身を引いた状態と戻るべき現実との狭間からの揺れ動きが感じられる。物語Ⅰでは、睡魔と戦いながらも、その状態のままである。「負けた場合はそのまま眠りの世界へ」という物語の閉じ方は、読んでいる方としても、眠りの世界へずっと誘われるかのような予感を感じさせる。物語Ⅲでは、主人公は「仕事に戻っていく」。自分の内部での対立は続いているということだが、内部はどういう状態でも、主人公が体を動かし「仕事に戻って」いることが窺える。主人公が体を運んでいることから、物語Ⅲの結末は、現実に戻っていく主人公の能動性が感じられる。

次に、自分物語とそれに対応する修正自分物語を比較してみる。修正自分物語Ⅰでは、ソファの上にうずくまる状況に至る原因が物語Ⅰに比較してかなり具体的に描かれている。自分物語Ⅰでは、「疲れ」という身体要因である。修正自分物語Ⅰでは身体的な疲れもさることながら、「友人に裏切られた」という精神的要因が表されている。自らの能動性を失ったまま、体の動きも思考の働きも止まってしまっているのは、両物語に共通している。物語の最後では、修正自分物語Ⅰでは、「母親の声」で現実の世界に戻っていく。自らの能動性を失った状態で、修正自分物語Ⅰに他者の声が入ってきたことは、自分物語Ⅰとの違いとして注目すべきことであろう。また、修正自分物語Ⅲでも、橋の上にたたずむに至る原因が、自分物語Ⅲよりもかなり具体的である。修正自分物語Ⅲの最後では、恋人との別れを決心し、自らの意志で部屋へと戻っていくという、ど

の物語にもない、強い能動性を感じる。先述したが、物語の結末に変化があると、同じプロットを辿っていても、ストーリーが変化してくる。

このように、同じプロットであっても、そのプロットの肉付けや結末に変化があると、ストーリーが変化する。同じプロットを辿っていながらも修正により変化が生まれることは注目すべきことである。被検者Aの物語では、主人公は現実と、現実と離れた世界とを迷い、彷徨っているが、この迷い立ち止まった部分で、背景や結末として様々なヴァリエーションが表現されている。これらの物語が被検者Aのプロットをなぞっているものであるならば、被検者AはTAT物語を作る事、また、修正し作り直すことによって、内的な作業を重ねているように感じられる。

(iii) 他者物語とその修正 (他者物語, 修正他者物語)

・書き直されたプロット

他者物語Ⅲと修正他者物語Ⅲとを見てみると、修正他者物語Ⅲは他者物語Ⅲの雰囲気は残しつつも、プロットは踏襲されていない。主人公は、信じていた恋人にふられ「考える余裕がない」状態にある。「どこかにいく気力もない」。物語の結末では、「重い体」をなんとか動かして自分の部屋へと戻っていく。修正他者物語Ⅲは、被検者Aが自分物語、修正自分物語で表現した「主人公が現実から少し身を引いた状態、『何も考えられない』状態と戻るべき現実の世界との狭間で立ち止まっている、うずくまっている」というプロットと同様な筋を辿っている。被検者Aは、物語を作り、作り直しする過程の中で同じプロットを繰り返し表現しているのだ。他者物語を前にしても繰り返しそのプロットが表されることが、この修正他者物語Ⅲより分かる。

他者物語Ⅱと修正他者物語Ⅱを読むと、二つの物語は異なるプロットである。が、修正他者物語Ⅱは、被検者Aが作った他の物語のプロットとも異なる。修正他者物語Ⅱで印象的なのは、主人公が2人の恋人であり、2人は一心同体で描かれていることだ。この物語の図版(ハーバード版の図版10)の特性もむろん考慮する必要がある。この図版から、2人の恋人が寄り添う物語はめずらしいとは言えない。そうではあっても、二人が「走りより抱き合う」様子は、離れていた2者が引き付け合ふ勢いが印象的である。ここで、修正段階で書き直され作られた物語(修正自分物語Ⅰ, Ⅲ, 修正他者物語Ⅱ, Ⅳ)での共通性に気づく。修正後の物語には、「信じる(ていた)相手」の存在がどの物語にも置かれているのだ。修正後の物語ではこの「信じる(ていた)相手」が主人公に大きな影響力を持っている。修正後によく登場するこの「信じる(ていた)相手」は被検者Aのプロットで重要な役割を担っていることが伺える。修正自分物語Ⅰ, Ⅲ, 修正他者物語Ⅳでは、「信じる(ている)相手」は主人公の期待や信頼を裏切る。主人公はショックで思考の行動もストップしてしまう状況が描かれている。図版の特性を考えた上としても、修正他者物語Ⅱで「信じる(ていた)相手」と強く結びつき、「走りより抱き合う」物語を被検者Aが作ったことは、注目すべき点であろう。物語の作り手のプロットに注目すると、繰り返されるプロットとは異なるプロットが表現されることがあるであろう。繰り返されるプロットとそれとは異なるプロットは、ナラティブにおけるドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーの関係と重なる可能性を含んでいると筆者は考えている。本研究において、表現された異なるプロットの要因に提示された他者物語という刺激も考慮されるべきであろう。外的に提示された物語が被検者にどのような影響を与えるのかは、今後研究すべき事柄になるであろう。

(iv) まとめ

海本：TAT（Thematic Apperception Test）に表されるプロットについて—ナラティブの観点から

本調査全体の結果と、被検者Aの物語内容の検討とを合わせて、次のことが考察された。TATにおいて、知らず知らずのうちに選びとり、自らが構成してしまうパターンというものが表れることが明らかになった。そのことより、TAT物語には、ナラティブ・ストーリーの要素があると考えられる。ナラティブ・ストーリーは繰り返して語られることと同時に、変化の可能性を有することが重要であろう。本研究においても、その可能性が示唆されている。TATが20枚のシリーズであることも、繰り返しの事象と変化の、両方の可能性が開かれることを許容していると言える。本研究からTATにナラティブの視点を置くことの重要性が明らかにされ、今後とも研究を重ねる必要があると考えられる。

参 考 文 献

- ・ 安香宏, 藤田宗和 (編) 1997 臨床事例から学ぶTAT解釈の実際. 新曜社.
- ・ Morgan, C. D. & Murray 1935 A method for investigating fantasies. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 34
- ・ Murray, H. A. et. al. 1938 *Explorations in Personality*. Oxford. New York. (マレー 外林大作 (訳) 1961, 1962 パーソナリティ I, II. 誠信書房.)
- ・ Murray, H. A. & Bellak, L. 1941 *Thematic Apperception Test Blank*. Harvard Psychological Clinic.
- ・ Murray, H. A. 1943 *Thematic Apperception Test: Manual*. Cambridge Harvard University Press.
- ・ 鈴木睦夫 1997 TATの世界—物語分析の実際. 誠信書房.
- ・ 坪内順子 1984 TATアナリシス. 垣内出版.
- ・ 辻悟, 高石昇 1959 「精神療法」 戸川行男他 (編) TAT診断法双書. 中山書店.
- ・ 海本理恵子 2004 「TAT再考」 京都大学大学院教育学研究科紀要 第50号p. 386-398
- ・ 大山泰宏 2004 「イメージを語る技法」 皆藤章 (編) 臨床心理査定技法 2. 誠信書房

(博士後期課程 3 回生, 心理臨床学講座)

(受稿2004年 9 月 9 日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

Plots in TAT: From the standpoint of “narrative”

UMIMOTO Rieko

This article attempts to consider TAT stories as narrative. In the current research 108 subjects were asked to make TAT stories. Then they were to revise stories made by others as well as by themselves. It is compared how they changed stories, and it is clear that own stories are likely ‘to be changed less at the ending’ or ‘not to be changed at all.’ This result shows that structural tendencies subjects have in storytelling also appeared in the TAT. One of the TAT stories and its revise are closely examined. In that case the subject re-wrote all his story after revising. However the plot he originally made and used appeared again in the newly made story. In conclusion it is possible that the TAT stories express the plots as claimed to be found in narrative.